

家畜衛生だより 平成29年1月

紀北家畜保健衛生所

tel 073-462-0500

紀南家畜保健衛生所

tel 0739-47-0974

紀南家畜保健衛生所 東牟婁支所

tel 0735-58-1481

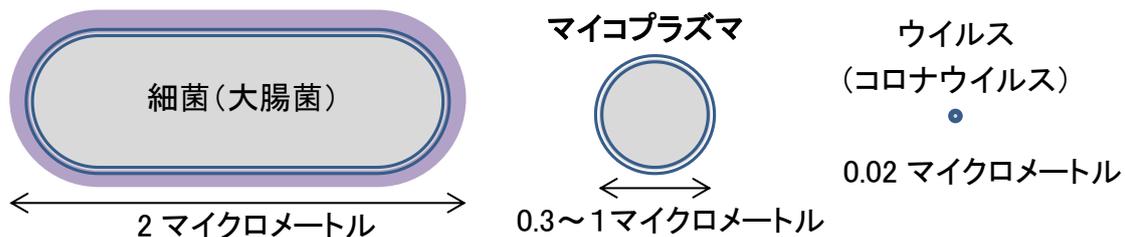
牛のマイコプラズマ病

マイコプラズマは、一般的な細菌にない特徴を多く持っており、治療や対策に注意が必要な病原体です。牛にとってマイコプラズマは、子牛の肺炎・中耳炎や乳房炎など様々な病気の原因になります。

●マイコプラズマの特徴

特徴① マイコプラズマは小さな細菌

マイコプラズマは種によって形が異なりますが、基本的に球形で直径0.3~1マイクロメートルと、他の多くの細菌と比べて小さいのが特徴です。



特徴② マイコプラズマには細胞壁がない

多くの細菌は細胞壁という殻をもっていますが、マイコプラズマには細胞壁がありません。このため、マイコプラズマには細胞壁に作用する抗生物質（ペニシリン、アンピシリン、セファゾリンなど）は効果がありません。マクロライド系、テトラサイクリン系、リンコマイシン系、ニューキノロン系の抗生物質などが有効です。

また、細胞壁がないため乾燥や熱に弱く消毒薬も効きやすいので、畜舎内の清掃・消毒・乾燥を徹底するのもマイコプラズマ対策として非常に有効です。

特徴③ マイコプラズマは自分だけでは生きていけない

マイコプラズマは、自分が生きていくのに必要な栄養成分の一部を自分で作れないため、宿主から栄養をもらわないと生きていくことが出来ません。このため、自然界では宿主細胞が無くては長く生存できません。

●マイコプラズマが起こす代表的な病気

○ 子牛のマイコプラズマ肺炎

マイコプラズマによる肺炎の症状は、発熱・せき・鼻水など一般的な肺炎と似ていますが、慢性化あるいは重症化すると治療困難なのが特徴です。治療には抗生物質の投与が有効ですが、マイコプラズマに効かない抗生物質もあるので、獣医師に相談してください。

マイコプラズマは他の細菌やウイルスと共同で肺炎を悪化させることが多いため、マイコプラズマを疑う肺炎が多発する時は、病牛の隔離や消毒などの基本的な対策に加え、初乳を十分に給与する・密飼いを避ける・輸送ストレスを軽減するなど、子牛の防御能力を維持する対策を強化しましょう。

○ 子牛のマイコプラズマ中耳炎

耳の中に膿がたまる病気で、特に20～40日齢の子牛に多発します。発熱や肺炎に似た症状の他に、病気にかかった方の耳が下がる、首を傾げるなどの症状が特徴です。病気が進行すると、膿が神経を圧迫して顔面麻痺が起きる場合もあります。

治療は抗生物質や消炎剤の全身投与の他に、耳の穴を洗浄したり、耳の毛を刈って通気をよくする、といった方法も有効です。

肺炎と同じくストレスを減らし、子牛の防御能力を維持する対策を強化しましょう。

○ マイコプラズマ乳房炎

急激かつ長期的な泌乳量の減少、乳中の体細胞数の著しい増加が特徴です。マイコプラズマ乳房炎は、汚染されたミルクや床に落ちた汚染乳汁を介して牛から牛へ広がるだけでなく、肺や子宮から移行してきたマイコプラズマが原因となることもあります。本病はきわめて難治性で、罹患牛は長期間マイコプラズマを排出し感染源となります。また、感染しても症状を示さない不顕性感染牛からも感染が広がるため注意が必要です。

対策としては、定期的な検査を実施すること・感染を疑う牛は隔離し搾乳順を後にすること・正しい手順で搾乳すること・不顕性感染牛を導入しないことなどです。

また、マイコプラズマ乳房炎にかかった母牛の乳を子牛にあたえると、子牛の肺炎や中耳炎の原因になるので、加熱（56℃、30分）してから子牛に与えるようにしましょう。

気になることや不明な点がありましたら、最寄りの家畜保健衛生所までお問い合わせください。